

<論文>

# 外地の国文学と「風土」

—犬養孝の万葉風土論と台湾—

笹沼俊暁

## 要旨

戦後の日本で、学界のみならず一般的な認知度や影響力をもった国文学者の一人として、犬養孝(一八九七～一九九八年)がいる。犬養孝の実行した「万葉旅行」は、戦後、特に高度成長期の日本において、「失われゆく日本」を回顧し、『万葉集』を国土・風土に密着したものであるとして再認識させようとしたものといえる。『万葉集』については、明治以降に近代ナショナリズムの時代文脈のなかで「国民歌集」として発見され国民国家の文化装置・聖典として特権化されたことが、品田悦一によって明らかにされている。万葉旅行は、そうした近代の「創られた伝統」としての万葉観にもとづきそれを再生産する活動の最たるものの一つといえる。

万葉旅行は、昭和戦前期に、犬養自身が先駆者として名指す国文学者・辰巳利文らによって開始された。それが「想像の共同体」としての日本の自己同一性の形成に貢献した具体的経緯については、すでに歴史学の領域において、辰巳の事例に即した実証的な検証がなされている。本稿では、そうした研究成果に基づきつつ、犬養の万葉論が、戦前・戦中における海外植民地の存在との間に持っていた関係性を考察する。犬養は、戦時中に台北高等学校教授として植民地台湾に『万葉集』を啓蒙していた。そうした体験は、彼の国文学論の一つの背景となっていたと考えられる。本論では、戦前・戦中の国文学における風土・環境論をふまえたうえで、犬養の国文学論の性格を浮き彫りにしていきたい。

キーワード: 「日本文学」「万葉集」「植民地期台湾」「風土論」

## 1 はじめに

戦後の日本で、学界のみならず一般的な認知度や影響力をもった国文学者の一人として、犬養孝(一八九七～一九九八年)がいる。犬養孝の実行した「万葉旅行」は、戦後、特に高度成長期の日本において、「失われゆく日本」を回顧し、『万葉集』を国土・風土に密着したものとして再認識させようとしたものといえる。『万葉集』については、一九九〇年代以降いわゆる国民国家論の立場から、それが近世以前にはかならずしも重視されなかったにもかかわらず、明治以降に近代ナショナリズムの時代文脈のなかで「国民歌集」として発見され国民国家の文化装置・聖典として特権化されたことが、品田悦一によって明らかにされている(1)。万葉旅行は、そうした近代の「創られた伝統」としての万葉観にもとづきそれを再生産する活動の最たるものの一つといえよう。

万葉旅行は、昭和戦前期に、犬養自身が先駆者として名指す国文学者・辰巳利文らによって開始された。それが「想像の共同体」としての日本の自己同一性の形成に貢献した具体的経緯については、すでに歴史学の領域において、辰巳の事例に即した実証的な検証がなされている(2)。本稿では、そうした研究成果に基づきつつ、万葉旅行が、戦前・戦中における海外植民地の存在との間に持っていた関係性を考察する。犬養の経歴を特徴づけるものとして、戦時中に台北高等学校教授として植民地台湾に『万葉集』を啓蒙し、引揚者として帰還した点をあげることができる。そうした体験は、彼の国文学論の一つの背景となっていたと考えられる。

戦後、犬養のほかにも、当時を代表する国文学者や比較文学者の何人かが、外地からの引揚者だった。同じく台湾在住者だった島田謹二は、その『華麗島文学志』のなかで、繰り返し台湾の環境・風土の問題について言及している。彼らにとっての外地体験は、その文学論に大きな位置を占めていた。本論では、戦前・戦中の国文学における風土・環境論をふまえたうえで、犬養の国文学論の性格を浮き彫りにしていきたい。

## 2 近代の国文学と風土論

犬養孝は一九〇七年に東京に生まれた。第五高等学校を経て一九三二年に東京帝国大

学文学部国文学科を卒業した。第五高等学校では万葉学者の上田英夫、東大では久松潜一、佐佐木信綱らに学んでいる。卒業後は神奈川県立横浜第一中学校教諭となり、一九四二年には台湾総督府台北高等学校教授として渡台した。一九四五年に台北で陸軍に招集を受けたのち、翌年の敗戦後に内地へ引揚げ、大阪高等学校国語科講師に着任した。以後、大阪大学、帝塚山短期大学、甲南女子大学で教鞭をとった。『万葉の風土』（塙書房、一九五六年）、『万葉の旅』（社会思想社、一九六四年）、『続・万葉の風土』（塙書房、一九七二年）、『続々万葉の風土』（塙書房、一九八六年）などの著作がある。

犬養は、『万葉集』の故地の実地調査にもとづく万葉風土学の代表人物として知られるが、風土性を重んずるその手法は、明治期に創設された近代の国文学研究が本来的にもつナショナルリスティックな性格を、とくに顕著にあらわしたものの一つと言ってよいだろう。明治維新以後の日本では、官学アカデミズムを中心に「国文学」あるいは「日本文学」という学問の枠組が形成された。近代西欧起源の文学概念の枠組を前提としつつ、「想像の共同体」としての国民国家の自己同一性を担保する文化システムの役割を果たすものだったといってもよいだろう。むしろ、幕藩体制下においても、すでに本居宣長ら国学者によって、「日本」意識を背景とした和文テキストの文献学的な検証が行われていた。しかし、宣長らが、古代の日本の和文系資料の権威のみを絶対視・普遍視していたのに対して、明治期の国文学は、日本文学のほかにも、世界各国のそれぞれの文学の存在を前提するものだった。そして、他国とは異なる日本の国文学の固有性が主張される際に、その根拠として、しばしば自然環境や風土の問題が重視されていたのである。

日本ではじめての日本文学史の一つである一八九〇年の芳賀矢一・立花銚三郎『国文学読本』（畠山房）は、その「緒論」で次のように述べている。「而して文学の発達する所以に至りても、其主因とする所は、此原動力の継続に因るべしと雖も、其影響を及ぼす事情に至りては、蓋し一にして足らず。今其尤も著きものを挙げれば、種族なり、政治なり、宗教なり、哲学なり、夫れ人の国を成すや、茲に其土を定め、茲に其界を限る、風土各異にして経歴互に分る。各国民の文学が各特性を有するも、亦自然の勢なり」(3)。国ごとの風土に応じて、それぞれの国民の文学の特性が作り出されるというのである。さらに、同年の三上参次・高津鎌三郎『日本文学史』（東京金港堂）では、「邦国によりて、其固有の特質を具ふる文学を指して、其国文学といふ」と述べて、各種の国文学を構成する要素として「国民固有の特質」「身外の現象」「時

運」の三つを挙げている。第二の「身外の現象」とは、「邦国の地位、地勢の形状、気候の寒暄、天象の異動、山川の景色、動植物の有様等、人の周辺の事物」であるという(4)。自然環境や風土性によって、それぞれの国の文学の特徴が作り出されるという論理が、ここにも見出されるのである。

これらの最も初期の日本文学史は、フランスの文学史家イポリット・テーヌ Hippolyte Adolphe Taine (一八二八～一八九三年)の著作『英国文学史 Histoire de la littérature anglaise』影響をうけたものといわれる。特に、三上・高津『日本文学史』はその本文中で「仏国の碩学ティンは、文学史を編して、其国の心理学を研究すといへり」と、直接名前を挙げている。テーヌは、文学の国民的な特徴とは、人種・環境(風土・社会構造)・時代の三つの要素によって決定されるという立場をとっており、三上らが国文学の構成要素として指摘する「国民固有の特質」「身外の現象」「時運」の三項目は、テーヌから直接影響をうけたものと言ってよいだろう。テーヌによれば、「我々は、共同の故国から最後の国家分立に至るまでのアリア民族の歴史を、唯臆げにしか辿り得ないにしても、しかし、我々は一方ゲルマン種族と他方ギリシア・ラテン種族との間に現れている深い差異が、大部分、両者の定住した地域の差異に起因していると断言することができる」(5)という。このように、文学や芸術の構成要因を種族や時代性に加え、環境や風土に求める発想は、いうまでもなく一九世紀の人種主義およびナショナリズムを背景としたものである。

国文学における風土論がとりわけさかんに論じられるようになったのは、昭和初期である。当時は、世界恐慌による農村の窮状を背景として農本主義が台頭し、政府による農村漁村経済更正運動や郷土教育運動も展開された。さらに、日本学術振興会の援助のもと、柳田国男を中心として全国の大がかりな山村調査がおこなわれるなど、日本民俗学が活発化している。国文学界では風土の問題がしばしば取りあげられており、しかもそれは、当時の日本主義の時代風潮と国体明徴運動に参加する側面を強くもっていた。東京帝国大学国文学科教授の要職にあつて当時の国文学界の指導的立場にあり、また『国体の本義』(一九三七年)編纂にも関わっていた久松潜一は、日本文学の性格を形成するものとして「歴史」と「風土」という、いわば縦と横の要因を設定していた。縦の要因とは、万世一系の皇統と肇国の精神であり、横の要因とは、空間的要因としての日本の風土である。久松は、和辻哲郎による「牧場型」「砂漠型」「モンスーン型」の三つの風土の分類を受け継いでいた。その上で、「西洋やアフリカといふ土地

が牧場的であり、砂漠的であり、またさういふ土地が平原であるのに対して、日本は何処に行つても山と水、高い所と低い所との起伏が実に著しいといふ事を感じる。この点が文学に於て種々の美を生み出す上に大きな力を持つてゐるのではないかと思ふ」(6)と述べるのである。久松のこの風土論は、『国体の本義』の「解説叢書」の一冊として刊行された著書『我が風土・国民性と文学』(一九三八年)において明確に体系化されており、まさに直接の政治イデオロギーとしてまとめられたものだった。

犬養孝の先駆者というべき辰巳利文による万葉地理研究は、こうしたナショナリズムと郷土主義が前景化した時代に、本格的に開始された。歴史学者の黒岩康博によれば、大正末から昭和初めにかけて、『万葉集』の文献的基盤が整備された。そして訓詁注釈以外の作家研究や動植物研究などと並んで、万葉地理研究が活発化し、国文学者たちの間で広く支持を受けた。奈良県出身の辰巳は、奈良県各地を実地に歩いて観察や聞き取りを通じて歌枕を比定し、また「古跡写真」を多用した出版物の刊行を活発におこなった。風景写真を多用することによって万葉歌枕を「日本中どこにでもある農村風景」として可視化したのである。また臨地指導や万葉故地の保存運動に取り組むなどした。それによって、奈良県＝「日本のふるさと」意識を構成する要素としての万葉故地の田園風景を、人々に広めたというのである(7)。

こうしたなか犬養孝は、東京帝国大学を卒業した直後の一九三三年にはやくも最初の論文「万葉集に於ける地名について」を発表していた。『万葉集』における地名の問題を重視し、万葉風土研究についての方法論を、早くもまとめた形で発表したのである。犬養によれば、『万葉集』は、『古今集』等の他の歌集と比べて「土地に対して親しみ深く、体験的な関係に置かれる場合が多い」という特徴があり、地名の現場を歩いて地理的な実際を探ることは、過去の文化を明らかにする文化史的な意義があるという。なぜなら、「万葉人が体験のどのやうな場合にどのやうな心の状態の場合に、どのやうな態度で、土地乃至地名といふものに対したか。又各々の生きた歌に於いて、体験のどのやうな姿相に於いてその土地・地名を表現してゐるか、その土地の万葉集に於ける生かされ方を考へようとする事」(8)が必要だからである。もともと明治以来の国文学が範としていたドイツ文献学に加え、ディルタイをはじめとしたドイツ系の精神科学と文芸学の影響が色濃く見受けられる方法論といえよう。当時の国文学界では、ドイツ系の精神科学や文芸学が流行していたのである(9)。またそこには、その土地に生きる「万葉人」の素朴な感情を表現した「民謡Volslied」「国民歌集」とする、国民国家の文化装置と

しての近代的な万葉観が典型的に見て取れる。そしてさらに犬養は、『万葉集』所収の歌にみられる地名の地理的な分布をおおまかに整理し、「第一、大和を中心とする地」「第二、筑前大宰府を中心とする地」「第三、石見」「第四、越中を中心とする地」「第五、東国、殊に関東地方を一带とする地」に分類した。こうした分布は、瀬戸内海沿岸諸地、若狭越前以北諸地、箱根までの東海道諸地という連絡線上の諸地をとおして、大和を中心として各地方に影響を与え関係性にもとづいていると指摘し、それを簡潔な図にしめしていた。

右の如く地名の土地分布の動きは、太宰府・越中・石見等夫々地方の中心地集合地として存在しつつ、一方、大きくは連絡線上の地を辿つて大和の影響下、原動力の下に動かされて居り、関東の如きも亦、地名分布の発生の上には、多くそれ独自のものを持ちながら、尚大和との間の諸々の関係を免れていない。いはば大和は大和自身として近隣を従へた一つの集団をなすと同時に、広くは、地方的諸中心地に大きく働きかけてゐたと言へる(10)。

この犬養の地名分類は、それ自体の当否とは別に、大和を中心として各地に広がる「日本民族の声」の分布を可視的にしめず機能をもっている。そして、明治以降の国文学という学問が漠然と認識する「国文学」の基本的な範囲をあらわすものともなっているといえよう。もともと国文学は、いわゆる大和を中心とした古典的な文字文化のみを対象としがちだったからである。

### 3 台湾における国文学

犬養は、一九四二年一月に台北高等学校へ教授として赴任した。当時は国文学界においても、「大東亜共栄圏」の建設という時代風潮のなかで、「外地」についての言及があらわれていた。犬養が台湾へ赴くさいにはすでに太平洋戦争がはじまっており、潜水艦の攻撃が頻繁な東シナ海をわたっていったという。のちに犬養は、「戦争中ですから、出征のようなふん囲気があったことは事実ですが、それにしても別れがあんなに悲しいことはありませんでした。妻と二人、泣き通して、やっと涙が止まったころふと車窓の外を見ると、ぼんやりとした目に富士山が

飛び込んできました」(11)と回想している。

ここで、植民地期台湾での「文学研究」の状況について簡単に述べておきたい。日清戦争後に日本の統治下におかれたのち、台湾では、しばらくは漢詩文などの「旧文学」についての伝統的な詩話や雑誌月評、年度評などが多くを占めていた。一九二〇年代からは中国大陸での文学革命の影響を受けた新文学運動やプロレタリア文学について、台湾人のあいだでさかんに議論が戦わされた。三〇年代には、中国白話文に対しての台湾話文運動がおこり、ついで台湾郷土文学論争がまきおこることになった。一九四三年には黄得時による「台湾文学史序説」が発表された(12)。在台内地人のあいだでは、おもに趣味的な漢詩、短歌、俳句の創作や批評がおこなわれていた。一九二二年には台北高等学校が、そして一九二八年には台北帝国大学が設立され、アカデミックな国文学の教育・研究体制が整えられていった。

台北帝国大学は、在住内地人の子弟の高等教育を目的として設立されたもので、国策としての「南支・南洋の研究」をめざし、文政学部には南洋史学、土俗学、人種学の講座をもうけたところに特色があった(13)。国語・国文学講座は、国語学者の安藤正次、福田良輔のほか(14)、国文学者として、記紀や平安文学の注釈研究の植松安、井原西鶴や坪内逍遙の書誌研究で知られる瀧田貞治が担当した。植松安には『古事記新釈』(大同館、一九二一年)、『本邦書誌學概要』(図書館事業研究会、一九二九年)、『神の国日本』(皇道精神研究普及会、一九四三年)などの著作があり、瀧田貞治は『逍遙書誌』(米山堂、一九三七年)、『西鶴の書誌学的研究』(野田書房、一九四一年)、『伝統演劇瑣談』(書物展望社、一九四三年)などを刊行している。また台北帝大に隣接する台北高等学校では、国語学者で源氏物語研究者の伊藤慎吾、平安朝文学の松村一雄らが国語を担当していた。伊藤は『近世国語学史』(立川文明堂、一九二八年)、『源氏物語の風俗語の新研究』(風間書房、一九七四年)、『風俗上よりみたる源氏物語描写時代の研究』(風間書房、一九六八年)などの著作を著しており、松村には編著として『平安朝短篇集』(春陽堂、一九三二年)がある。いずれも、注釈や書誌学、風俗研究などの明治以来の日本文献学の学風をもつ人々といつてよいだろう。

当時の台北帝国大学は、植民地における国策を具現する最高学府・研究機関として、潤沢な予算が当てられた。また当時の内地の保守的な帝国大学ではまだ本格的でなかった近代文学の研究条件すら、急速に完備されつつあった(15)。植民地という場所では、宗主国内部のしがらみから比較的自由であるために、しばしば宗主国では実現できない先進的な政策等

が実験的に実施されることがあるのである。ただし、記紀や平安文学、井原西鶴や坪内逍遙の文献学的な研究は、あくまでも内地の国文学＝日本文献学の延長である。国文学の土俵の上で、内地以上の文献上の環境づくりがめざされたのである。その点は、言語学や人類学、人種学、歴史学の分野で、植民地支配の国策を目的として「南洋研究」が活発になされていたのと同対照的である。その背景には、周辺地域への視点を人類学や言語学、歴史学等にまかせて、ヤマト系の文字文献の文明的な優越性を前提としてその研究に没頭する国文学アカデミズムの体質があったと考えられる。

さらに、犬養孝が台北高校に赴任した一九四二年は、戦時体制下における皇民化政策が進められた時期にあっていた。一九三六年に予備役の海軍大将・小林躋造が台湾総督に着任すると、台湾の皇民化・工業化・南進基地化がすすめられ、さらに第一次近衛文麿内閣の「国民精神総動員計画実施要綱」が発表されたのちそれらはいっそう強化された。新聞の漢文欄廃止、日本語使用の推進、寺廟整理、神社参拝強制、改姓名運動などがおこなわれた。すでに長年の「国語」普及活動により、台湾人の多くの若者にとって、教育や書籍を通じての教養の基盤は日本語によって形成され、一九三〇年代頃から日本語による創作活動をおこなうものもあらわれるようになっていた。一九三七年以降には公的な出版物において日本語以外による言語が認められなくなった。一九三九年に組織された台湾文芸家協会の名義で発行された文芸誌『文芸台湾』には、西川満ら内地人作家のほかに、張文環、楊雲萍、黃得時、龍瑛宗、林芳年、黃鳳姿、邱淳洸、王育霖らの台湾人作家が参加している。また、在台内地人による短歌結社「あらたま」には、台湾人の郭水潭、陳奇雲、鄭嶺秋、馮正樞、藍錦昆、林美、原住民のブユマが属しており、「南台短歌」には呉振蘭、陳日新、江紅緞(川原幸子)、陳笑美(澄田笑美子)、浩秋恵が属していた(16)。

国文学には、このような皇民化政策にさいして社会的役割が求められた。台湾人作家の王昶雄は、一九四三年の日本語小説「奔流」のなかで、台湾の文化を捨て徹底した皇民化を追求する台湾人の姿を描いている。登場人物の国文教師・伊東春生(朱春生)は次のように述べる。

「あなたは長らく内地に居られたことだし、殊に精神文化方面には趣味がおありのやうだから、お気づきのことと思ふが、俗に日本精神といふけれど、しかしこれは古典を通じて

見なければ、凡そ意味をなさない。例えば古事記ですがね。我々があれに引きつけられるのは、その心と詞とに少しも歪められない素直さがむき出てゐるからですよ。或るらしい学者も云つてゐるやうに、幼な児が祖父母の膝下にすがり寄つて、好奇の目を輝かしながら、その昔語りに耳を傾ける愉しさがあるんだ。日本の古典を離れては、日本精神もないもんだよ」(17)

こうした皇民化の流れの中、台湾における国文学の頂点にいた国文学者たちも、内地人および台湾人に「日本精神」を注入するための国策的活動をおこなった。台北帝大の植松安は一九四三年に、『古事記』をはじめとした古典の解釈をとおして「日本精神」を説く『神の国日本』と題する著作を刊行している。「序」によると、もともと「本島人の為わかり易く国体の本義を書いてくれとの需に応じ」て書いた「我等の大日本帝国」を改題して出版したもので、「台湾に於ては需要も多く又白川君から出征の皇軍や国民精神の講習会や高砂族の人々などにかなり多く寄贈」されたという(18)。また近世文学研究者の瀧田貞治は一九四三年の「現段階に於ける台湾演劇」で、台湾における民衆的な布袋戯や傀儡戯、皮影戯などの伝統演劇や新劇を、皇民化運動のための手段として再編することを主張していた。「大衆を喜ばせ、その情操を養ひ、教養を高め、日本人的自覚を持たす」演劇の必要性を説き、そしてそのうえで台湾語での上演はあくまでも過渡的なものであるべきと説いていた。瀧田の主張は、台湾における演劇のいわば国文学化を目指すものだったといえよう(19)。さらに犬養が赴任した台北高校では、「台北高等学校報国校友会」が組織され、文芸部の雑誌『翔風』には「古典特集」として、学徒出陣を控えた学生たちによる日本精神を鼓舞する古典論が収録されていた(20)。

#### 4 台湾の風土と『万葉集』

犬養孝は、このように皇民化を前提とした時代性のなか、台湾で『万葉集』を講ずることになった。当時、台北高校での犬養の授業に接した学生に、のちに『台湾万葉集』の編者となる呉建堂(孤蓬万里)がいたが、呉の回想によれば、台北高校での犬養は、校長の了解のもとに国語の時間を『万葉集』のみの講義にしてしまった。「これは全国の旧制高校で当時唯一のケースである。そして第一時間目から、後に「犬養節」と呼ばれるようになった独特の亢揚詠唱

調で躍動感を表わし、学生たちを魅了してしまった」(21)という。もともと台北高等学校の学生の約八割、そして台北帝国大学の学生のほとんどは在台内地人の子弟だったが(22)、日本人だけでなく台湾人に対しても国文学の精神を伝授することが国文学者たちの役割となり、犬養もまたその仕事の一端を担う一人として台北高校に赴任したといえる。そして、台湾時代の犬養が、『万葉集』の講義をつづじて皇民化政策に参画する一方で、台湾の独自の風土性に着目した点に注意したい。

一九三〇年代から四〇年代にかけての台湾では、国文学の精神の普及と皇民化が進められる一方で、植民地主義を前提としつつ、台湾の独特の風土や環境についての議論がおこなわれていた。おもに短歌や俳句の実作者たちのあいだで、独自の風土・環境に即した独自の文学の確立が議論されていたのである。和歌や俳句の実作者は、たんに前近代の古典作品を講じていればいいというわけではなかったからである。

台湾の俳句は、正岡子規門下の渡辺香墨らを中心にさかんになった。渡辺らは、子規にならって伝統的な月並俳句を廃し、現実の台湾の風物を写生することを訴えた。一九三〇年代からは山本孕江が『ホトギス』系の俳誌『ゆうかり』に拠って、台湾に特有の題材を詠むように指導していったのである。「写実の精神に徹せよ。そうすると台湾の俳人としては台湾の風物を詠うのが任務となる」(23)。また、一九二二年には、台北で短歌結社「あらたま」によって歌誌『あらたま』が発刊され、一九二七年にはその佳作を集めた詞華集『攻玉集』が、一九三五年には第二詞華集『台湾』が出版されている。このあらたま短歌会は、特定の文学理念を正式に決めていたわけではないものの、万葉流派の特集がしばしば組まれるなど、万葉集を重視する『アララギ』の影響下が色濃く見受けられるものだった(24)。歌集『台湾』には、台湾に生活で日々目にする独特の風物が、多くの会員の歌によって詠みこまれている。

一九二九年から敗戦にいたるまで台北高校および台北帝国大学で教鞭をとり、台湾における内地人の文学について多くの論文を発表した比較文学者・島田謹二は、台湾内地人による文学を国文学の延長としての「外地文学」として確立させるために、台湾在住者の実感的な視点から独自の景物や異人種の共住する生活を描く「エグゾチズムの文学」そして「リアリズムの文学」の発展の必要性を説いていた(25)。そして島田は、俳誌『ゆうかり』と並び、「あらたま」による歌集『台湾』を、台湾文壇における画期的なものとして重視していた。「ここでは内地人といわず、本島人といわず、高砂族といわず、各種の階級の各種の教養をもった各種の職業・

年齢・性別の人々の創刊号以後昭和改元以来九年に至る間の生活感情が、或は高く朗らかに、或は低くつつましやかに、或は憤激高揚のうちに、或は平淡和楽のうちに、さまざまな姿もて歌い上げられ、「台湾」という土地の声をさながらに聴かされる思いがする」(26)と評価していた。日本内地では、『万葉集』を天皇から庶民にいたるまでの民族の素朴な生活感情をあらわした「民謡Volkslied」であるとする論がアララギ派を中心に展開されていたが(27)、島田謹二はこうした『万葉集』をめぐる議論を念頭においたうえで歌集『台湾』を評価していたと思われる。民衆の生活感情を幅広くあらわした、いわば台湾の風土の中で新しく生まれた独自の『万葉集』としての評価なのである。

比較文学者の橋本恭子によれば、島田の議論は、すでに台湾領有から年月が経ち、台湾長期滞在者に加え台湾で生まれ育つ内地人も増加していた状況下において、中央文壇にはない台湾ならではの地方文化を育てようとする時代文脈を持っていた。橋本によれば、そうした地方主義は、日本帝国の獲得した新領土において、「日本文学」に新たな領域を付け加える植民地主義の政治性に収斂されていく性格をもっていたという(28)。島田は、台湾の外地文学をあくまで国文学の延長と考えていたのである。

そもそも国民国家および帝国の形成は、地域や階層等によって様々に異なる人々を、いかにして統合していくかにかかっている。さきにも述べたように、一九三〇年代には、戦争の時代性を背景として「郷土」の問題が大きくクローズアップされた。しかしそれは、国家あるいは帝国を相対化するものというよりは、それを強化する言説としてあった。「ゆうかり」グループによる短歌集『台湾』は、戦後の『台湾万葉集』の先駆とも呼べるものだが、それは植民地期においては、台湾の独自の地方性を打ち出しつつ植民地主義の強力な磁場の中におかれざるを得ないものだった。

犬養孝によって台北高校で『万葉集』の講義がおこなわれる以前の台湾の文壇では、こうした議論の積み重ねがあった。さきにみたように犬養は、「郷土」「地方」についての議論がさかんに交わされた一九三〇年代の日本内地において、当時の国文学界でひとつの流行のテーマともなっていた文学の風土・地理研究の視点を吸収し、『万葉集』の地名研究を早くから志していた。しかし国文学における風土性や郷土性の問題は、日本内地だけではなく台湾のような植民地においても議論されていたのである。そして台北高校に赴任したのち、当時の多くの台湾における詩歌の実作者と同様に、犬養もまた台湾の風土性から少なからぬ刺激を受けたよ

うである。戦後に犬養は次のように回想している。

それから次に、旧制台北高等学校の先生になりました。台北に行ったことは、私にとってまた、違うプラスになったのです。それは風土の違いを知ったことです。春は花、秋はもみじというのが、当たり前ではない場所のあることが体験できてね。

皆さん、日本の中に居るから四季の移り変わりがあり、それが当然だと思っていますが、台湾は年中常夏です。私が行ったのは二月でしたが、向こうから火の玉が飛んでくるので、学生に「あれは何か」と聞くと、「先生、知らないんですか。蛍ですよ」と教えられ驚きました。火の玉のように大きく不気味です。だから近寄ってくると人魂ではないかと、逃げるのです。

日本なら「ホ、ホー、ホータル来い」と歌い、そこに俳句が出来る下地がある。私たちはこうした日本独特の四季をふだんは意識していません。京阪電車に乗って、宇治の蛍狩りと出ているのを見て「もう初夏だな」と思うわけで、俳句や季題が生まれたわけでしょう。台湾で初めて風土の持つ意味が分かったことは収穫でしたね。

私は台湾で敗戦に逢い、書物のすべてを失ったけれど、“風土”という大きなお土産を持って帰れたのは幸せでした(29)。

犬養によれば、こうした台湾での体験は、のちに戦後の彼の万葉研究の原点となっていったという。『万葉集』をはじめとする日本古典文学が前提とするものと異なる自然環境に接することによって、『万葉集』における風土の問題の重要性を認識させられたというわけである。だが、在台期間が長期にわたっていた島田謹二や、当時の多くの台湾在住の歌人・俳人とは異なり、犬養孝にとって台湾の環境・風土が、そこに自身のアイデンティティーの一部を求めるようなものであったという証拠は見当たらない。

まず、犬養孝の台湾滞在期間は、約四年と比較的短期間である上に、さきにも述べたようにすでに太平洋戦争の開戦後であり、戦後の回想によるかぎり出立の際はさながら出征のような雰囲気だった。実際、一九四五年三月には陸軍に召集されており、犬養にとって台湾はなかば戦地のような感覚があったかもしれない。とても落ち着いて台湾という土地柄に帰属意識をもつような状態ではなかっただろう。台湾時代の犬養は、田辺幸雄との共著『日本文学者評伝

全書 笠金村 武市黒人』(青梧社、一九四四年)を刊行し、また、台湾で発行されていた雑誌『台湾時報』に「島崎藤村『夜明け前』について」(一九四三年一〇月)と題する論考を発表している。いずれも、作品の舞台となる大和や木曾の土地と自然に実際に立ち会った筆者の追憶の記述からはじまっている。「晴れた日の夕、今は青草茂る平城宮址の一角に立って、はるかに南の方、耳成・畝傍・香具三山の、霞に浮ぶ島の如く鼎立する景を眺め、平野を取りまく青垣山の波濤を顧望する時誰か、うるはしきやまとの感慨なきものがあらう」(30)という具合である。台湾という地において、万葉の地理・風土の美しさを讃え、いわば望郷の念を募らせているかのようである。

当時の犬養孝にとって台湾とは、時代的な要請と職務上、皇民化教育の対象だった。後にも述べるように、台北高校の学生たちに対しては、『万葉集』に普遍的な価値があると教えていたようである。「大東亜共栄圏」「八紘一宇」の叫ばれる当時の台湾において国文学の普遍性を述べることは、皇民化政策の後押しをする文脈をもたざるをえないものである。そして当時の在台内地人の文学者のなかに、台湾の独自の風土を日本文学の新しい一員として付け加えようと試みていた人々がいたことに、犬養がまったく気づかなかったとは考えにくい。しかし犬養自身にとって台湾は、あくまで異郷であり、その風土に対する興味とは、外来者としての異国趣味の域を出るものではなかったと考えられる。その風土との比較を通じて日本内地の『万葉集』の風土の特性を再認識させる働きをするものだったといえよう。犬養は、植民地台湾のエリートたちに対し『万葉集』を講ずるといふ、皇民化政策を直接推進する立場にあったが、島田謹二らのように、その結果どのような現象がおこるか、またそれを大日本帝国のなかの「外地文学」としてどのように発展させていくべきかまで踏み込んで考察することはなかった。まして、国文学の皇民化がどれほど政治的な暴力性をもつ行為なのかについてはまったく無頓着だった。彼にとって植民地台湾とは、軍隊生活を送るなどあくまで「異郷」としての体験地であり、それに対しての「郷土」としての日本内地とその風土が生み出すものとしての『万葉集』に対する望郷意識を、より先鋭化する役割を果たしたと考えられる。彼の台湾経験は、彼自身の学問的枠組のなかにもともと深く埋め込まれていた、日本内地と大和系の文字文献のみを対象とする明治以降の国文学の枠組を郷愁によってより強化するものだった。そしてそのことによって、犬養の万葉論は敗戦後、海外植民地を喪失したのちの「日本」の姿によりよく合致することにもなったのである。

## 5 おわりに

繰り返したように、近代の国文学は「一國国文学」の側面を強く持っていた。外地の文学に対する意識はきわめて軽いものであったが、一方で、たとえば植民地期の台湾において日本語での創作活動に従事していた内地人の多くは、台湾の風土・環境にまつわるイメージを多用した作品を多く作っていた。外地在住の文学者にとって、土地の風土・環境の問題は創作活動をするうえで強く意識せざるを得ない問題であり、現地の風土性に対し帰属意識と愛着をもつものも多かったのである。国文学者のうちの何人かも、戦争と言う時代を背景として、外地の問題に向き合わざるをえなくなっていった。朝鮮経験をもつ高木市之助や、中国経験をもつ風巻景次郎、そして台湾での島田謹二らが文学環境論や外地文学論を展開したことには、こうした事情があった。こうしたなか、犬養孝は、台北高校時代に皇民化政策の一貫として、『万葉集』を在台内地人および台湾人の子弟に教える役割を果たしたのである。

しかし戦後の彼は、戦時中の台湾での皇民化の側面を切り捨てて万葉論を展開した。戦後の犬養孝の万葉論に台湾での経験があたえた影響、そして彼の教えを受けた『台湾万葉集』の編者林呉堂らの戦後の台湾での動向等について、詳細は別稿で改めて論じることにする。だがここで簡単にそのあらましを述べるとすると、戦後の犬養は、台湾がはじめてから「外国」であったかのように、台北高校時代を回想するようになった。台湾でのエキゾチックな「外国体験」を媒介として、「故郷・日本」に対する郷愁を語るようになるのである。そしてそこにはさらに、高度成長期以降の「国土」の変化にともなう「失なわれゆく日本」へのノスタルジーが重ねられていくことになる。もともと犬養孝は、「一國国文学」の体質を強くもっていたが、戦後は、もはや正式に「外国」となった台湾を対象化することで、日本内地に限定された枠組をさらに強化していくことになるのである。

(ささぬま としあき 東海大学日本語文学系)

## 注

- 1 品田悦一『万葉集の発明－国民国家と文化装置としての古典』新曜社、二〇〇一年。
- 2 黒岩康博「高田十郎『なら』に見る近代大和の「地域研究」ネットワーク」(『日本史研究』二〇〇六年五月)、同「奈良万葉植物園の創設過程」(『ランドスケープ研究』二〇〇八年三月)、同「万葉旅行の誕生 風景写真と臨地指導」(『国文学 解釈と教材の研究』二〇〇八年四月)。  
また、犬養孝については、『万葉・その後 犬養孝博士古希記念論集』(塙書房、一九八〇年)にくわしい略年譜や著述年譜がおさめられているほか、関係者による複数の「随想」がおさめられている。また、小野寛「犬養孝博士と「万葉集の風土」研究」(『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇二年二月)は、犬養の万葉研究のおおまかなアウトラインを紹介している。そのほかは、著作の書評や万葉集研究における先行研究紹介としての記述等がほとんどであり、犬養の言論や活動を植民地主義と戦後の時代文脈の中で思想史的に検証したものは、管見のかぎりでは存在しない。
- 3 『芳賀矢一選集 第二巻』国学院大学、一九八三年、17ページ。
- 4 三上参次・高津楯二郎『日本文学史』東京金港堂、一八九〇年、27ページ。
- 5 テーヌ『英国文学史 第一巻』平岡昇訳、創元社、一九四三年、29ページ。
- 6 久松潜一『我が風土・国民性と文学』文部省教学局、一九三八年、
- 7 黒岩康博「万葉旅行の誕生 風景写真と臨地指導」(『国文学 解釈と教材の研究』二〇〇八年四月)。
- 8 犬養孝「万葉集に於ける地名について」(『万葉集講座 二巻』春陽堂、一九三三年)。
- 9 笹沼俊暁『「国文学」の思想』(学術出版会、二〇〇六年)、第三章を参照。
- 10 犬養孝(8)前掲論文。
- 11 犬養孝『我が人生 阿蘇の噴煙』星雲社、一九八八年、194ページ。
- 12 日本統治期の台湾文学については、尾崎秀樹『近代文学の傷痕 ー 旧植民地文学論 ー』(岩波書店、一九九一年)、島田謹二『華麗島文学誌 ー 日本詩人の台湾体験』(明治書院、一九九五年)、『よみがえる台湾文学』(東方書店、一九九五年)、河原功『台湾新文学運動の展開』(研文出版、一九九七年)、松永正義『台湾文学のおもしろさ』(研文出版、二〇〇六年)、同『台湾を考えるむずかしさ』(研文出版、二〇〇八年)、葉石濤『台湾文學史綱』(文學界雜誌社出版、一九八七年)、陳芳明『後殖民台灣 文學史論及其周邊』(麥田出版、二〇〇七年)等を参照。

- 13 鍾清漢『日本植民地下における台湾教育史』(多賀出版、一九九三年)。
- 14 安藤正次の国語政策については、小町 守「台湾植民地期の言語政策—安藤正次と二語併用の台湾」(『科学技術史』二〇〇五年一二月)がくわしい。
- 15 台北帝国大学で文学概論とフランス語を担当した島田謹二は次のように回想している。「こんなふうに当時としては最新の海外図書と雑誌とを自由に手にすることができていた。二年に一度は賜暇で内地に帰ってくると、東大、その他の大学の図書館や研究室を見てまわる。台北では日常座右に置いておくものにどこでもめぐりあえなかったのには、一寸溜飲がさがった。全く研究資料の蒐集に熱心で、比較的経費の潤沢な外地の大学の研究室に籍を置かせてもらったおかげである。／ ことにありがたかったのは、西洋文学研究室のおとなりは、国語学国文学研究室で、近代(明治以降)の文芸雑誌が一括してぞくぞく入手されていたことである。戦前のいかめしい帝国大学では、明治以降の近代文学なんてテンデ相手にされていなかった。それが一講座あたり年間二五〇〇円づつの図書購入費が割りあてられているのに目をつけてか、一誠堂以下の大手の古書肆がえたりとばかり搬入する。「柵草紙」も、「文学界」も、「早稲田文学」も、「三田文学」も、「スバル」も、忽ちズラリとならぶ。こんなものがあつたらうかと怪しまれるような群小雑誌も忽ち揃えられる」(島田謹二(12)前掲書、6ページ)。
- 16 孤蓬万里『台湾万葉集物語』岩波書店、一九九四年、五〇ページ。
- 17 王昶雄「奔流」(川原功監修『日本植民地文学精選集(台湾編)2 台湾小説集』ゆまに書房、二〇〇〇年)。
- 18 植松安『神の国日本』皇道精神研究普及会、一九四三年。
- 19 瀧田貞治「現段階に於ける台湾演劇」(『台湾文学』一九四三年)
- 20 『翔風』台北高等学校報国校友会、一九四五年。
- 21 孤蓬万里(16)前掲書、43ページ。
- 22 鍾清漢(13)前掲書、 ページ。
- 23 島田謹二(12)前掲書、205ページ。
- 24 上田哲二「1920年代の台湾日本語短歌について—台北あらたま短歌会を中心に—」(未公刊)。
- 25 同前、476ページ。
- 26 島田謹二(12)前掲書、424～425ページ。
- 27 品田悦一(1)前掲書。

28 橋本恭子「島田謹二『華麗島文学誌』におけるエグゾティズムの役割」(『日本台湾学報』二〇〇六年五月)、同「在台日本人の郷土主義—島田謹二と西川満の目指したもの—」(『日本台湾学報』二〇〇七年五月)。

なお、当時の台湾での短歌をめぐる議論は、内面や風景の描写を重んずる近代的な文学観を前提としている点に注意したい。彼らの議論は、明治以降の文学観が外地にまで広がりつつあった当時の状況のなかでなされたものである。そもそも言語テキストがその土地の風土や環境の影響をなんらかの形でうけることは、時代や場所を問わず普遍的におこる現象であるが、しかし、文化は自然環境の影響を受けつつも、それとは相対的に独立して独自の論理のもとに展開する側面をもつ。特に古典文学の多くは、題詠や趣向など間テキスト性の文脈のなかで展開される側面を強く持っており、台湾における歌人・俳人が排撃した「月並」が描く自然とは、そうした間テキスト性を媒介としたいわば抽象的・普遍的な自然である。すなわちテキストのなかの風景や自然と、「現実」の風景・風土との間の距離や相関関係は、「風景の発見」以後の文学観を背景とすることで、とりわけ近代において文芸の創作・理論上の大問題となる。そのため近代的文学観のもとでは、古典的な表象と現実の「郷土」あるいは「地方」の自然・風土性の特殊性とのあいだの関係や齟齬が、しばしば問題になるのである。

柳田国男は一九二八年に刊行した『雪国の春』の「自序」のなかで「様式遵奉と模倣との必要は、たまく国の中心から少しでも遠ざかつて、山奥や海端に住つて住まうとする者に、殊に痛切に感じられた。それ故に都鄙雅俗といふが如き理由も無い差別標準を、自ら進んで承認する者が益々多く、其結果として国民の趣味統一は安々と行はれ、今でも新年の勅題には南北の果から、四万五万の献詠者を出すやうな、特殊の文学が一代を覆ふことになつたのである」と述べている。古典文学の表現が、気候や生活の異なる各地に浸透することで、それぞれの地方の特色を活かした文学の発達を阻害してしまったという批判である。そして、柳田の主張は、たんに地方のそれぞれの郷土文化の振興のみを訴えるものではなく、それを前提としたうえで日本全体の「国土」の意識をも喚起しようとするものだった。柳田は、「狭隘な都会人の芸術観を以て指導しようとするれば、その結果は選に洩れたる地方の生活を無聊にするのみならず、兼ねては不必要に我々の祖先の、国土を愛した心持を不明ならしめる。所謂雅俗の弁の如きは、言はゞ同胞を離間する悪戯であった」と述べていたからである。

29 犬養孝(11)前掲書、51～52ページ。

30 『日本文学者評伝全書 笠金村 武市黒人』青梧社、一九四四年、11ページ。